

加島美術店主・加島林衛さんに伺いました

日本美術を “体感”する 新しい楽しみ

日本美術への興味が深まると、鑑賞するだけでなく、身近に置いてみたいという気持ちも芽生えます。そんな美術好きの抱く夢をかなえてくれる存在が、現代的空間で迎えてくれる「加島美術」です。名品の数々を間近で見ても、親身な対応を受けると、淡い思いも確かなものになるに違いありません。

デザイン/テイエ 撮影/篠原宏明 構成/山本毅 高木史郎(本誌)

現代的空間の中に 日本美術を取り入れ 暮らしや心を豊かに

日本美術を見る楽しみから 買う楽しみへ

東京・京橋にある「加島美術」を訪ねてみると、クラシカルで瀟洒な建物のガラス窓の奥に見覚えのある筆致の掛軸。思わず心がときめいて、つい足早になってしまいました。

コンクリートの壁面やパーテーションで仕切られた1階は、従来の古美術商のイメージとは大きく異なり、入りやすい雰囲気です。

この空間をつくり上げたのが、店主の加島林衛さん。新しい日本美術とのつきあい方を幅広い層に提案する、初心者にとって心強い存在です。

「もともと父の代から古美術商を始めたいという背景がありまして、私は京都の古美術商で修業してから跡を継ぎま

した。それから、美術品を買っていた

だく空間を考えたときに、これまでと同じ形態では、お客様のニーズに合わなくなるのではないかと思ったのです。作品を紹介することそのよさを理解していただくこと。床の間だけでなく、洋室に飾ることを想定した提案。それらを考えてでき上がったのが、このギャラリー空間でした」

それぞれの作品に提示されている作者名や題名の下にはなんと、価格が明示されています。日本美術の紹介としてこればかり革新的なこと。

「密室で対し、内々に紹介する古美術商の接客には確かに利点があります。ですが、現代では、より多くのお客様に訪れてもらいたい日本美術を知ってもらうために、情報を適度に開示したほうが良い。たとえば、伊藤若冲の作品の価格がわかると、それをもとにしていろいろ見ていくうちに適正価格がわかってくるはず。高額になるものもありますが、日本美術を購入する際の勉強の一助になればという思いから、ここを始めました」

店内を眺めると、軸装や額装が施された日本美術が、様々な壁によくなじんでいて、ところどころに配された立体作品や現代作家の作品の取り合わせにも目を奪われてしまいます。

「日本文化には床の間という建築様式がありますが、そのルーツである中国にはありません。欧米も同様で、現在の日本でも床の間は珍しくなっています。そこで、壁面に飾っていただくために、このような展示にしたのです。もしも掛軸の下の部分に空きができたなら、李朝の棚を置いたりして、インテリアとともに楽しむことにもつながるでしょう。現代の住空間の中に日本美術を取り入れ、暮らしや心に豊かさを感じていただきたい……。その思いをこの空間で表現しました」

見て楽しむものから、買って楽しむものへ。日本美術とのつきあい方を深化させていくにあたって、心がけておきたいこととはなんでしょう。

「それぞれの段階に応じて、好みや希望を汲み取り、誠実に対応してくれる店を選ぶことが第一です。稀代の蒐集家たちはみな、信頼のおける美術商とともにコレクションを広げていっ

たものです。店との出会い、人との出会いを大切に、何度か足を運んで相談をする。買うという行為に、このステップは欠かせません」

美術商というのは、実際にはどのような役割を果たしているのでしょうか。「美術商を人間の動脈と静脈にたとえると、日本美術の魅力を伝えて販売するのが動脈。ほうほうに埋もれているものやコンディションのよくないものを見つけ出し、蘇らせることが静脈。この両方をバランスよく保つことが大切だと考えています」

そのために新たに開いた加島美術では、ほかにも様々な趣向があるとか。「併設している茶室でお茶とともに楽しんでもらったり、解説の場を設けたりして、表面的な美しさだけでなく、もっと奥に踏み込んで、理解を深めていきたいと思っています」

日本美術が人生を豊かにしてくれるものだとするならば、日本美術への理解を深めた上で、作品の購入をサポートしてくれるのが加島美術です。日本美術を所有するという大きな夢も、ここでなら実現できそうです。

加島美術を彩る 名画・名品の数々

右ページ・正面/伊藤若冲『松図』絹本水墨 104.0×40.0cm(全体191.0×52.0cm) 奥/井上有一『花』額装 51.0×80.0cm(全体69.0×97.0cm) 左奥/浜田浄『20-G-5』油彩・キャンパス 132.0×87.5cm 左手前/慈雲尊者『阿彌陀』紙本 88.0×28.0cm(全体175.0×41.0cm) 1 井上有一『花』前衛書家としての世界的にも高い評価を得ている井上有一の筆使いが見もの。2 右/長澤蘆雪『躑躅群雀図』絹本着色 大井如水箱書 108.0×36.0cm(全体200.0×51.0cm) 左/雀亭浄光『花鳥図』絹本着色 115.0×39.0cm(全体199.0×51.0cm) 雀亭浄光は伊藤若冲の友人であった絵師。若冲ファンにとっても興味深い存在として注目されている。3 伊藤若冲『松図』(部分) 奇想の絵師、反骨の絵師と呼ばれる若冲らしく「松が暴れていますね」(加島さん)。4 円空『十二神将像』木彫 高さ54.0×幅14.0×奥行9.0cm 『朽ちた美』を体現する円空仏。5 井上有一『雨ニモ負ケズ』額装 10.5×62.5cm(全体28.8×74.2cm) 奥に秘められた作者の気持ちまで伝わってくるような書だ。 ※この特集に掲載した作品は現在、取り扱っていない場合があります。



加島林衛 かしましげよし 1974年、東京生まれ。京都の古美術商で10年間修業し、作品を見る目を養うとともに接客などを学ぶ。その後、父親が経営する加島美術に入社し、大規模な展示即売会「美祭-BISAI-」を立ち上げ、カタログの企画や販売、新規事業などに積極的に取り組む。平成21(2009)年、代表取締役就任。

日本美術の魅力を手感できる 「美祭-BISAI-」は必見!

代表的な作品はこちらです!



小野竹齋「春朝」6,000,000円
絹本着色 額装 共板 32.0×45.0cm (53.0×65.0cm) 竹内栖鳳に師事し、戦後日本画壇の重鎮として活躍し、文化勲章を受けた小野竹齋。その絵は清らかでやわらかく温かいことが特徴。



井上有一「輪」4,500,000円
紙本 額装 海上雅臣シール 61.0×72.0cm (80.0×91.0cm)
型破りて自由な書に生涯こだわった井上有一は、世界的に高い評価を得た現代書家。その氣迫が一字に漲っている。



和樂が大注目!

異才の浮世絵師・北齋の
気魄みなぎる水墨作品

葛飾北齋「宝珠」3,500,000円
紙本 84.0×27.0cm (全体158.0×30.0cm) 江戸時代に活躍した浮世絵師・葛飾北齋は、世界で最も有名な日本人芸術家。水墨においても、卓越した画力がうかがい知れる。



河鍋晩斎「七福神図」1,700,000円
紙本着色 91.0×30.0cm (全体186.0×41.0cm) 狩野派に学び、幕末から明治にかけて浮世絵師として活躍。七福神は好んで描いた画題で、本作は中でも秀逸なもの。



仙居義梵「七夕画賛」1,800,000円
紙本淡彩 130.0×44.0cm (全体197.0×54.0cm) 禅画では白隠慧鶴、慈雲尊者とともに三墨跡に数えられる仙居義梵。ユ一モアにあふれた画風は根強い人気を誇る。

年々盛り上がる一方! 加島美術の展示即売会

今年4月23日(土)〜5月5日(木)

祝、加島美術の春秋の恒例となっている展示即売会「美祭-BISAI-」の第19回が、今回ご紹介した京橋の店舗で開催されます。

店内には古画から現代のものまで約400点を超える作品が集められ、美術館のようにガラス越しではなく直に見ながら、日本美術を味わう楽しみを堪能できるのが「美祭」の人気の秘密。

しかも、美術館の展示会にも貸し出されるような作品がそろっており、今年も盛況が予想されます。

また、「美祭」の目録も評判が高く、確かな情報のもとより、実際に作品を飾った空間の提案や著名人との対談、物故作家の特集、職人紹介や数寄者のコラムなど、出品作の写真のみならず読み物としても楽しめるという力作。事前に用意しておいて、この機会に日本美術の楽しみ方をさらに進めてみたいものです。この目録は加島美術への電話やファックス、ホームページで申し込み可能。無料ですが、在庫に限りがあるので申し込みはお早めに。

日本美術がある暮らしはこんなに素敵!

1 2階の茶室、掛軸は尾形乾山「桜図」扇面台貼幅 紙本着色 122.0×66.0cm 石川県美術館開館十周年記念「琳派の芸術-光悦・宗達・光琳・乾山-」名作展」出品作品「尾形乾山全作品とその系譜」(雄山閣)所載 ビルの中にあるとは思えないほど落ち着いたたたずまいの茶室。2 長澤蘆雪「躑躅群雀図」(部分) 奇想の絵師・蘆雪の作品の見どころは「蘆雪の雀」と称される優れた描写。ツツジの朱色も美しく保たれている。3 白隠慧鶴「布袋図」紙本水墨 47.0×58.0cm (全体165.0×77.0cm) 禅画で変わらぬ人気を誇る白隠の作品。「壽」の袋を広げている吉祥の絵だが、布袋さまの目線は何かもの言いたげ。いかにも白隠らしい味わいがある。4 六田知弘「CK-22」26.0×37.5cm (全体27.7×39.0cm) 写真作品はどのように飾って暮らしの一部に。5 桂ゆき「河童」ブロンズ 高さ18.0×幅7.0×奥行き9.0cm 階段の途中に置かれた現代アートにも、センスが横溢。6 柴田見真「円窓鐘馗之図」(部分) 絹本着色 共箱 庄司芳真鑑定証 120.0×39cm (全体195.0×51.0cm) 超絶技巧で知られる見真にしては珍しい箱書きによると、これは80歳の時の作。当時人気を集めた画題だが、鬼が頭を抱えて逃げる表情はユーモアたっぷり。金砂子の輝きも美しい。



乾山や蘆雪、白隠の名画が間近で見られる!

新感覚の日本美術ギャラリー 「加島美術」とは こんなところなんです

日本美術に対する興味や愛情をかきたてる美空間

古美術を取り扱う店は、おいそれと初心者を受け付けないようなイメージがありますが、加島美術はそれを一新。モダンなギャラリーのような1階と茶室のあるクラシックな趣の2階に、様々な時代の日本美術が溶け込んでいて、美術のよさを素直に味わうことができる空間を創出しています。

しかも、それぞれの価格が明示されているのがうれしいところ。巨匠の作品は軒並み7桁を超えますが、有名ではないものの注目すべき絵師なら気軽に手の出せる値段。それがわかるのも面白さのひとつです。現金決済のみではなく、クレジットカードの利用も可能で、これまでよりも一歩も二歩も、日本美術が身近に感じられてきます。もうひとつ特筆したいのが、店主の加島さんをはじめとした目利きのスタッフ

による説明。古の名絵師から現代美術の作家まで、鑑賞のポイントにエピソードを交えたお話は、美術館では味わえないこと。すぐ間近で作品を見ることができると、購入に関する確かなアドバイスもあって、安心できることこの上ありません。

取り扱っているのは、古画と呼ばれる仏画、江戸時代の絵画や書といった古美術商らしいものから、国内外の現代美術、立体作品まで幅広く、多様なジャンルを取り上げた特集展示は、美術好きの間で注目の的。

京都の名だたる数寄屋大工と左官が手がけた2階の茶室では、古材を効果的に配し、経年変化を楽しむために壁の内部には鉄が塗り込められているなど、細部にいたるまで加島さんのこだわりが詰まっています。

加島美術はまさに、初めて訪れたときから心ゆくまで日本美術を楽しむことができ、理想的な空間なのです。



加島美術
東京都中央区京橋3-3-2
☎03-3276-0700
FAX 03-3276-0701
info@kashima-arts.co.jp
http://www.kashima-arts.co.jp/
営業時間/10時~18時
定休日/日曜・祝日
平成25(2013)年にリニューアルした店舗。1、2階の空間には様々な壁面、2階には茶室があり、日本美術を現代生活の多様なシーンに取り入れるアイディア満載。